

「キリストとうまじゅん 平和ぬ道 あっちゃびら」
(キリストと共なる平和の道を歩みましょう)

2020年6月23日 慰霊の日によせて
ウェイン・バーント司教のメッセージ

那覇教区兄弟姉妹の皆さん、

今年の6月23日は、終戦75周年の節目にあたり、沖縄戦の犠牲者を追悼し平和を祈念する特別な慰霊の日です。例年行っている平和巡礼、小祿教会でのミサ、魂魄の塔での祈りの集会は、コロナウイルス感染拡大予防のために、休止となりましたが、それに代えて各小教区で同時刻に追悼ミサを捧げ、平和を祈念します。

教皇フランシスコは「戦争に訴えれば、それは即敗北です。戦争に打ち勝つ唯一の方法は、決して戦争しないことです」とアウシュビッツでのインタビューに答えました。沖縄の皆さんは教皇様のこの言葉の意味を誰よりも深く理解していると思います。

なぜなら『非核・平和沖縄県宣言』によると

「戦争は無差別に破壊し尽くす
すべての生命を
生活を
文化を
歴史を
自然を
太平洋戦争最後の地上戦があった
この地沖縄
街や村がやかれ
二十万余が命を奪われた
祖先が築き上げた文化遺産は失われ
地形をも変えた
その傷あとは今なお癒えない」

と訴えているからです。

聖ヨハネパウロ二世が「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです」と言われたように、沖縄戦の実相を見据えることは戦争犠牲者に対する大きな責任だけでなく、将来を担う子孫に対する責任でもあるのです。

沖縄戦を凝視すると、今も続く世界的・根本的な尊厳の課題が見いだされます。それ

は強大な力を持つ者が、小さく弱い立場の者を利用するために自己決定権を奪い、利用するという事実です。その最たる姿は、あらゆる極限状態の中でその醜い姿を現します。

歴史上、最も凄惨な戦闘と言われる沖縄戦では、日米両軍が我が物顔でこの小さな島のありとあらゆるものに対し蹂躪の限りを尽くしました。この沖縄を「捨石」とした扱いは75年を経てもなお、その自己決定権が無視されるという事実をもって脈々と続けられているのです。小さき者の側に立って、その声を聴き、その選択を尊重しない限り、真の平和は実現できません。沖縄に限らず世界のどこでも小さき島の声が無視して争いが起きています。フォークランド、ジブラルタル、香港、南沙諸島、ハワイ諸島、南洋諸島、ビキニ環礁等々、そこに住む人のみならず、そこに存在するあらゆるものの尊厳が尊重されない限り、真の世界平和と安定が実現できないことは、時代や場所を問わず明らかなのです。

真の世界平和の実現のためには、まず小さな島々を勝手に自分のものとすることや捨石として利用することを止め、その自己決定権を尊重することによって、世界平和の礎石（いしじ）として大切に扱わなければいけないのです。

そのことをキング牧師はみごとに表現しました。「真の平和とは、単に緊張がないだけではなく、そこに正義が存在することである」と。

私たちの沖縄はその小ささのゆえに、いにしえより近隣諸国との平和的交易に取り組んできましたが、特に凄惨な沖縄戦の体験を経て、小さな島の真の平和こそが世界平和につながっていることをより強く確信し、訴え続けています。

「戦争その悲惨な体験をいしずえとして

私たちは

世界の人びとへ訴える

一切の核兵器と

あらゆる戦争をなくし

武器にかえて対話を

そして愛と信頼で

地球を平和に満ちたみどりの星にしよう

私たち沖縄県民は

「イチャリバチョーデー」を合い言葉に

万国津梁の地の建設を希求し

世界の恒久平和を願い

声高らかに非核・平和沖縄県を宣言する」

那覇教区の皆さん、わたしたちは戦後の全滅状態から立ち上がり、数々の苦難を乗り越え、沖縄の文化、言葉、習慣などをあらゆる精神を守りながら、戦後75年の道のりを忠実に歩んできました。いまだ多くの取り組むべき課題が残っていますが、不屈の精神で将来に向かって歩み続けるなら、遠くないうちに、正義回復の戦いの終結、不正か

らの解放を迎えることができ、わが子孫は真の安全と平和な沖縄社会で、幸せな日々を過ごすことができるようになります。

今年私たちは同じ場所で集うことはできませんが、同じ時刻に一つの心をもってすべての戦争の犠牲者のために祈ることはできます。これからも、この同じ一つの心で沖縄の平和が全世界の平和の礎石（いしじ）となることを祈り求め、「うまんちゅぬ ぬちまむゆるたみに キリストとう うまじゅん 平和ぬ道 あっちやびら」（すべてのいのちを守るため、キリストと共なる平和の道を歩みましょう）。